

Network

The Japan Society of Archives Institutions Kinki District
Branch Bulletin

全史料協近畿部会会報デジタル版

No.87

2024.8.30 ONLINE ISSN 2433-3204

全史料協近畿部会第 169 回例会報告

2024 年（令和 6）3 月 9 日（土）

会場：京都芸術大学 直心館 1 階 J-11 教室

テーマ：近代紙資料の複製技術

曾我友良（貝塚市郷土資料室・全史料協近畿部会運営委員）

今回の例会は、オリジナルからコピーという複製物がどのように作られたのかという点にスポットを当てたワークショップであった。私たちが調査の現場で日常的にみるものなかで、近現代に作成された複製物（コピー）は様々な形である。その作成の工程はすでに再現が困難なロストテクノロジーのようなものもあると考える。いわゆる「ガリ版（謄写版）印刷」も日常から隔絶したものとなって久しいが、私がかつて年賀状印刷で使用した「プリントゴッコ」の装置はその応用らしい（2008年が最後の販売）。私の叔父がガリ版印刷のセットを持っており、原紙と鉄筆の使い方を小学生の頃教えてもらったことを記憶している。今回のワークショップでは、さらに古い「コンニャク版」を再現して、実際にオリジナルをコピーすることを行った。カーボンの利用法も、薄い紙を用いる理由や、そもそもペン先にインクを染み込ませて使うものではなかったことなど、自身の知識の浅薄さを思い知った。

「コンニャク版」は名前こそ聞いて知っていたし、「おそらくこれがそうだろう」と思われる複製物は見たことがあった。しかし、その名前にある「コンニャク」が実際はゼラチンであったことや、圧着してコピーすることなど、その過程がなかなか手間暇かかることに驚かされた。今日のコピー機がボタン一つで済むことからすれば、格段に大変な代物であった。複製物の歴史は、人の手で複製する手間を減らしていく過程であったのだとわかる。

職場に帰って改めて、近現代の行政（的）文書で用いられている複製物を確認した。青焼

きコピー、ガリ版印刷、コンニャク版も見つけ出した。歴史研究者は歴史資料に記されている内容を追求するものであるが、歴史資料を利用に供する側である私の業務としては、これまでのワークショップで取り上げてきた素材となる紙、それに用いる筆記用具、保存・修復していくための知識、それぞれを深めていくことが重要であると考えている。ワークショップの参加者はこれまでの5回あわせて、のべ80人程度であり、もっと幅広いみなさんに知ってもらいたい内容ばかりである。そのような観点から、これまでのワークショップの内容を周知するために活字化の必要性を感じている。講師をつとめていただいた大林賢太郎氏と、ともにこのワークショップに担当委員として関わってきた島津良子氏と私とで、それぞれの立場からまとめていこうと企画しているところである。多くの方々とワークショップで取り上げてきた内容を広く共有したい。

なお、ワークショップでの機材の取り扱い、材料準備など、大学院生のみなさんの協力を得ている。末筆ながら深く感謝申し上げる。

例会参加記

田中裕美（徳島県立文書館）

2024年3月9日、京都芸術大学にて第169回例会「近代紙資料の複製技術について」が開催された。私は例会には初めて参加したが、とても貴重な体験をさせて頂いた。

初めに近現代紙資料とは何か、前近代（江戸時代）とは何が変わったのか、とのお話があった。紙については、「手漉き和紙→洋紙（輸入紙、国産紙）や新しい和紙」に。和紙と洋紙の定義はないとのこと。筆記具については、「筆&墨汁→鉛筆・ペン（万年筆、ペン、ガラスペン）&インク」に。印刷方法については、「手書き書写→カーボン複写・複写インク」などに変わっていったという。



ガラスペン



カーボン紙と複写ペン

次に実際に色々な紙資料を見て、どんな複製技術が使われているのかを予想した。ガリ版印刷、活版印刷、シルクスクリーン、コンニャク版（ヘクトグラフ）、カーボン紙などの複

製技術が使われていた。インクの色に特徴があるものや紙に印刷の跡がついたもの、凄く細い線で書かれたものなどそれぞれの複製技法により特徴があった。

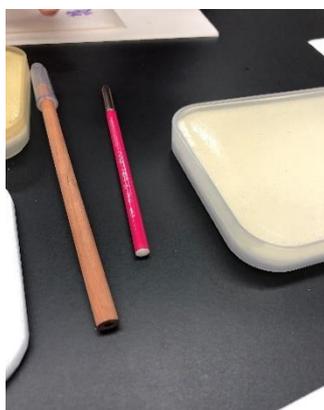
複製技術について、興味深いお話があった。まずは活版印刷について、日本では戦国時代に伝わり、この頃既に中国や韓国では盛んだったが、続け字やくずし字が活版印刷での対応が困難だったらしく、日本では整版（木版）手刷りの印刷が広まったという。他国では便利なものでも、使われる地域や文化によって必要とされている技術は違うのだと思った。

一番驚いたのはコンニャク版だった。同じグループになった参加者の先生から教えて頂いた。コンニャク版（ヘクトグラフ）と呼ばれているが、本当にコンニャクを使用していたかは誰も見た人はいないので謎であるとのこと。大林先生がコンニャクと豆腐で試作されたそうだが、インクを吸わないのでうまくいかなかったらしい。やはり、当時もコンニャクは使っていないのではということだった。徳島県立文書館でもコンニャク版を用いた資料があるとのことなので、見てみたいと思う。

今回のワークショップでゼラチンとグリセリンをご用意頂き実際に体験したので、下記の通りご紹介する。

◆コンニャク版での複製方法◆

1. 紙（原紙）にインクまたはコピーインクペンシルで書く（インク→にじみ防止のため乾くまで置いておく）
2. ハンディミストにて紙（原紙）を湿らせる
3. コンニャク版に紙（原紙）を置く（裏側からもミストをするか水をつけると写りがよい）
4. 上にボードを置き、重しまたは万力（限界までしめる）にて上から圧をかけ、10分程度おく
5. コンニャク版にインクが移ったら原紙を取り除き、新しい紙を湿らせ4.の工程へ
6. 紙に文字が複写されて完成



コンニャク版での複写を体験してみて、1枚ずつ印刷していくのはかなりの時間と手間がかかる作業だった。インクが滲んでしまったり、薄くしか転写出来なかったりと難しかった。

うまく複写された時には感動した。今ではパソコンからボタン一つで簡単に印刷が出来るので、改めて当時の大変さが身に染みた。コンニャク版資料の問題点として、インクが消えてしまい長期保存が不可能とのことだった。今回作成したのも、どれくらい持つのか、長持ちさせるのはどうすればよいのかなど、考えさせられることがたくさんあった。